

人でなくても、私がつまですよ。」  
**与右衛門**「お母さんこそ、ゆつくりしてくださいよ。気にしないでください。」



**お母さん**

「このごろ、お酒を買いに来てくれる人が多くなりまして。それに、

学問を習いに来る人も増えたので、与右衛門も忙しくなって来ましたね。そこで、与右衛門、そろそろお嫁さんをもらってはどうですか。」  
 突然、お嫁さんの話を勧められた先生は、驚きました。

**与右衛門**「はい、そうですね。ぼちぼち考えなくてはいけないと、思っています。実は、三十歳になったらと、考えてはいるのですが。」

**お母さん**「どなたか、おせわをしていただけそうな方がおられますか。」

**与右衛門**「はい。伊勢の亀山に、親切な方がおられます。お願いをしてみます。」

③ さつそく、先生は亀山の侍に手

紙を書き、「小川村の私の所に来ていただけるようなお嬢さんを、さがしていただけませんか。」と、お願いしました。何日かすると、亀山からその侍がやって来ました。

**亀山の侍**「与右衛門どの、良い知らせをもってまいりました。」

**与右衛門**「私のお願したこと、わざわざ小川村まで来ていただいたのですか。ありがとうございます。さあ、お上がりください。」

**亀山の侍**「さつそくでございますが、お知らせにまいりましたのは、伊勢の亀山藩士、高橋家の娘さんで、久子さんという方です。かしこくて気立ての優しい方だと、評判の娘さんですよ。」



**与右衛門**「ほう、それはよい方ですね。ありがたいことです。ところで、

こちら  
 は、貧しい浪人ぐらしです  
 が、来てもらえるの  
 でしょうか。」

**亀山の侍**「はい、そのこともお伝えしました。『学問を熱心にされている方で、その与右衛門殿をし

たつて、たくさんの方が勉強に来ておられます。』と、伝えました。すると、たいそう乗り気になられました。『是非、お願いいたします。』と言われ、話がとんとと進みました。」

**与右衛門**「そうですか。それはありがたいことです。お世話をかけますが、この縁談を進めていただきますよう、なにとぞよろしくお願います。」

④ 先生のお母さんは、亀山からお嫁さんが到着する日を「今か、今か」と待ちました。



**お母さん**「与右衛門、伊勢の亀山から小川村まで、何日位かかるのですか。」  
**与右衛門**「なれない旅の道だから、

五日以上かかるでしょう。」  
**お母さん**「そんなに。かかるのですか。早く来られるといいですね。」

**与右衛門**「私の妻になる人だから、お母さんは、そんなに気にしなく

てもよいと思いますよ。」  
**お母さん**「意地悪を言わないでください。新しい家族になるお嫁さんだから気になってしかたがないのですよ。」

⑤ 六日目の夕方、久子さんはようやく、小川村の与右衛門さんの家に到着しました。久子さんのお父さんとお兄さん、弟さんが付き添ってきました。村の人も喜んで家の外に出て、迎えてくれました。



**与右衛門**「遠い道のりをはるばる来ていただきまして、お疲れさまでございました。私が中江与右衛門と申します。どうぞよろしくお願いいたします。」

**久子の父**「娘、久子を中江与右衛門様の妻としてお迎えくださいまして、誠に幸せでございます。久子は、心やさしく、よく働くだけ取りえの娘でございます。中江様のお家のくらし方をしっかりと教